



# おおあし

第9号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/>  》

## 不可能を可能にするには

毎年のお正月の風物詩、「箱根駅伝」。テレビ中継や沿道での観戦を楽しみにしている方もいらっしゃるかもしれませんが。関東の20校の各大学が1チーム10人で東京箱根間を往復、10位以内に入ると翌年の大会に出場できます。しかし、11位以降の大学や本大会出場を目指す大学は10月に行われる「予選会」（各チーム上位10人の合計タイムで競われる）で10位以内に入らなければなりません。今年は41大学が10の枠に挑みました。激戦の結果、飯能市にある駿河台大学が8位で初出場を決めました。法政大学時代に箱根駅伝等長距離で活躍した、徳本一善（とくもとかずよし）監督が就任して10年目での快挙です。大正9年の第1回大会はわずか4校。東京高師（現 筑波大）・慶応義塾・早稲田・明治で、東京高師が最終区間で逆転優勝を果たしています。その後、出場校枠も拡大、平成には20校となりました。近年では伝統校や新興校が入り混じっての熱戦が続いています。今年、新興校の創価大学が準優勝を果たしたのは記憶に新しいところです。筑波大学・慶応義塾大学・明治大学は今回の予選会に出場、明治が本大会出場の切符を手に入れました。かつての常連校、日大、東農大、亜細亜大、大東大も落選という厳しい状況です。それだけ、選手の力が拮抗しているとも言えます。箱根駅伝が昭和の終わりからテレビ中継されるようになると、箱根駅伝の名も広まり駅伝ファンも急増しました。大学側もこの箱根駅伝を利用しない手はありません。なぜなら、出場した大学の知名度も高まり受験希望者も増えるからです。出場を維持しようとする大学、初出場を狙う大学、返り咲きを狙う大学、それぞれ、実力・実績のある指導者を招聘したり留学生を獲得したり練習環境（グラウンド・選手寮等）を整えたりしています。原晋監督を迎えた青山学院大学は5年後に33年ぶりの箱根復活を遂げました。立教大学のように「プロジェクト」（大学創立150周年の2024年の出場）を組んで箱根復帰に挑んでいるところもあります。今回は残念ながら16位（前回28位）で54年ぶりの出場はかないませんでした。新興校の課題は、スカウティングです。高校で実績のある選手は、いわゆる伝統校や各大会の上位入賞校に進学してしまうからです。新興校にとって箱根駅伝出場は「不可能を可能にする」ようなものです。まさにゼロからのスタートです。以下は駿河台大学、徳本一善監督への取材記事です。（「読売新聞」）

選手の意識を変えるのに8年かかったという。「タバコ吸うやつ、パチンコするやつ、土日に飲み屋で宴会するやつ。じっくり説得して毎年一つずつ消していった」論文や心理学の本を読みあさり、科学的に説明して納得させる。厳しいようだが、選手にはまず「君たちは才能がない」と理解させた。「同じ練習をしても、才能のある選手の方が（質の高い）いい練習ができる。その差は生活で埋めるしかないよ」スマホを回収して午後10時に就寝。午前4時半には各自が起き出し、朝練習に備えてストレッチを始める。炭酸飲料も飲まない。箱根にすべてを懸けているから、「精神的にはどこの大学より強い」という自負が備わった。

青学の原監督も就任当初、選手の生活態度を目の当たりにして「マイナスからのスタートだった」と後に述べています。明確な目標の共有、目標達成のための科学的根拠に基づく練習、規則正しい生活習慣、監督の選手との信頼関係などが今回の初出場につながったものと思います。私が注目したのは「基本的な生活習慣」を徹底させた点です。うがい、手洗い、換気、マスク着用で新型コロナウイルスの感染を低減できることが実証されています。実際インフルエンザ感染が激減しました。規則正しい生活習慣が、強い肉体・精神につながっていきます。今後も、学校では基本的な生活習慣（健康管理・生活規律・授業規律）を徹底して、学力定着・向上、体力向上、豊かな心の育成を目指していきます。ご家庭でも引き続きご指導よろしく願いいたします。（校長 橋本 浩）

